



生命の寂光

——石川桂郎の晩年

神蔵器

昭和四十九年三月十九日、町田市能ヶ谷の「香具山」で石川桂郎の読売文学賞受賞の祝賀会が開かれた。この時は二月十四日の新宿ステーションビルのレインボーホールでの受賞祝賀パーティーに都合により出席できなかった方をお招きしたもので高島茂、八幡城太郎、小島直の三氏と角川書店の二名、それに接待係のようなことで「風土」から私ら四名が加わった。

桂郎にとっては、ごく親しい人ばかりであったので、なかなか打ちとけた宴であったが、途中から荒れ模様になった。酒の上で原因というほどのことは別になかったのであるが、「お前さんのように恵まれ、幸せな家庭を持っている者には、俺の気持なんか解るものか」と、桂郎は『俳人風狂列伝』の装丁者小島画伯にからんでいた。桂郎のからみなど珍しくもないが、この日の桂郎はどこか今までは違っていた。からまれた画伯の方ではいい迷惑であったろうが、相手は誰でもよく、理由などなんでもよかったのだ。本当は出席

していた全員に不満をぶつけたもので、私は桂郎との三十年の間に、この時ほど孤独で暗い顔の桂郎を見たことがなかった。読売文学賞という大きな賞を受賞した顔などどこにもなかった。

その頃、桂郎が境涯俳句を否定したという噂が流れた。勿論これは単なる噂で、別に境涯俳句を否定などしたわけではないが、作品鑑賞上ならいざ知らず、作家としてはそんなレツテルを貼られることは迷惑なことであったのだ。桂郎流に言えば、屑屋がゴミ箱をあさるうが、山間僻地の隠亡がひと晩屍臭にまみれながら薪を足そうが、それはそれなりの稼ぎになり、銭を得、好きな酒を喰らい足腰を立てて働いている。高級な官吏が高い洋酒を飲み、隠亡は焼酎で満足しているとしても、作品上の生活にはなんら違いはなく、また風景句と境涯句とどちらが上でどちらが下などということもない。自然は人間があつて初めて意味深く存在し、人間の生活によつて新たな輝きを現わす。だから桂郎は「風景句」といえど

も、その中に作者がいなければならない」と言い、私たち弟子にも常に「自分の面うを持った句を作れ」と教え、同時に自然諷詠に力を入れるように推めた。それは桂郎が境涯作家として村上鬼城、尾崎放哉、富田木歩、村越化石などをあげているのをもつて、桂郎の境涯の意味するものが解つてくるし、波郷の「俳句私小説」説にも理解を示していたことも納得できる。

昭和四十六年六月、桂郎は心筋梗塞症状で中野区江古田の武蔵野療園に入院した。診断の結果は肝炎ということであったが、或る日私が見舞に行くと、桂郎は興奮して一人で腹を立てていた。何事が起きたのかと聞いてみると、同人会長の片岡亮一氏が見舞に見えられ「先生、ゆっくり療養して下さい。『風土』が二、三か月遅れたっていいではありませんか。先生のお体には替えられませんよ」と言ったのである。自分が生命よりも大事に思っているものを二、三か月遅れてもいいとは何事だ、と怒っていたのだ。実は私も片岡氏と同じことを申し上げようと思っていたところだった。一足遅れて病院に行ったために叱られずに済んでしまったが、桂郎が俳句にどれだけ打ち込んでいたかを思い知らされた。

たしかに、第一回俳人協会賞の受賞対象ともなった三十六年の「佐渡行」あたりから、桂郎はそれまで力を入れていた小説や随筆よりも俳句へ集中し、情熱を傾けるようになった。そして年ごとに俳句への思いは重く強いものになってきていた。「風土」が復刊し名実共に主宰になった時、永井龍男先

生から雑用に時間を消費されることを心配され、かつ文筆の才能をおしまれ忠告があつたとも聞いたが、桂郎の覚悟は決つていたようだ。しかし残念ながら健康には自信がなかったというより入院を繰り返し、いつも死と隣り合っている危機感を持っていた。

「香具山」での小宴は、やがて桂郎が「俺が死んだら青柳寺に葬ってくれ」と八幡城太郎氏に頼みはじめた。石川家の墓地は麻布の円澤寺にあるのだが、そうしたことは関係なく、ひたすら青柳寺に頼むと懇願した。何がそこまで思いつめさせたのかは判然とはしないが、その真剣さはとても酒の上のこととは聞き流せるものではなく、城太郎氏も引き受けるを得なかったし、私まで証人にさせられてしまった。

晩年というのは幾つかのことなのかよくわからない。まして桂郎に晩年があつたのかどうか、少なくともあまりふさわしくない言葉である。しかし、四十九年十一月十五日、聖路加国際病院に於て検査の結果食道癌と告知され、それ以後亡くなるまでの一年間は、人間の精神をはるかに超えた崇高なまでの魂の昇華であつて、平畑静塔氏も「黄金の時刻」と題した一周忌の「風土」特別号に寄せられた文の中に「その間の桂郎の俳句の飛躍昇天ふりと云うものは、息絶えんとした俳人の絶作としては類を見ない壮絶さと云つてよい。子規も亦及ばず、芭蕉にも果してこの大悟の進境が没前の時間に見られたかうかがわしい。これは絶対私の言い過ぎではな

い」とまで書かれている。

桂郎の人生は或る意味ではあきらめの人生であり、さらに言えば居直りの人生であった。しかも桂郎が力んで肩肘張つても、なかなか生活俳句の範疇から出られず、目指す俳句の完成には遠かった。自らに残された寿命と競争して駆けている状態では当然あせりもあり、これがあの「香具山」で見せた暗さでもあったろう。

不幸にして、俳句上からだけ言えば天が与えた試練として痛の宣告を受けてしまった。心の正体は思索探究によって把握し得るものではなく、生活体験によってのみ領得し得るものである。己れ一人に頼ってきた桂郎には神も仏もなく、この時はもはや居直りすら通ずる世界ではなかった。

枯枝にかこまれて春立ちにけり
みこまれて癌と暮しぬ草萌ゆる
啓蟄や話せば笑ふこゑのでて
かげろふに足とられてや野にころぶ
裏がへる亀思ふべし鳴けるなり

昭和四十九年十一月二十日、聖路加国際病院に入院、翌年一月十七日、四十五回のコバルト照射を終了して一時退院、十八日には鶴川の七畳小屋に戻った。右の句はようやく春を迎え、暖かさも増して、桂郎にとっては最後の比較的平穏な時期であった。けれども桂郎は癌と診断される前に、癌は不治で特效薬が出来るのは三十年、四十年先のことであらうと、私たちに話をしていくくらいであるから、たとえコバルト照

射で一時的におさえられたとしても、理性では万に一つの僥倖もないことを知っていた。一方人情としては自分だけの例外、コバルト照射や猿の腰掛けが予想外の効果をあげて助かるかもしれない、そうあって欲しいという願いがあったはずである。そして昼間は仕事に気もまぎれ希望的になり、夜は絶望の淵に呻吟していたのではなからうか。

この頃、朝十時頃になるとよく電話があった。受話器を置いて「はてなんの用事であったのだろう」と考えてみると、特に何の用事もなかったのである。「俺は生きているぞ、こんなに声も出て元気なんだよ」、桂郎はそう言いたかったに違いない、私に告げるというより、自分自身に告げ、確かに生きているということを確認したかったのであらう。それは夜がどんなに暗くみじめな長い時間であったかを物語るもので、文字通り裏返った亀のこのごとく、自分ではどうにもならぬところで、七畳小屋のベッドに唯一人必死にもがき、声なき声を絞って慟哭している桂郎の姿が浮かんでくるのである。されば悲しみの暗雲の切れ間にみせた「みこまれて癌と暮しぬ草萌ゆる」「啓蟄や話せば笑ふこゑのでて」等のさりげなき、透徹した平常心にいつそうの凄絶さを覚える。特に「草萌ゆる」の把握には万感こもごも俳句のもつ宿命のただならぬさまと、俳人の魂の氣息のすさまじさに目を瞠り、襟を正すばかりだ。山本蓬郎氏から「最近の桂郎さんの句が異状に冴えてきているが、何か変ったことはないか」と電話があったのもこの頃のことであった。

桂郎は病に對し人事を尽くした。コバルト照射も可能な限りは行い、猿の腰掛けも最後まで飲みつづけた。どれだけ効果があったかは問題ではない。現代医学の最高最良の方法をとることによって、与えられた己が生命の尊厳を守ったままで、そうしなければ全き死すらあり得なかったのだ。

七月十一日、三十九度以上の熱が続き、聖路加国際病院に再入院、七月十七日には細谷医師から食道癌の再発が告げられた。それ以後の桂郎の心境については、とうてい私などの付度できるところではない。頭からもみあげ、長く伸びた顎ひげまで白髪に埋った顔は、一見修道者のごとく厳しかったが、大きな目はやさしく親しみにあふれていた。九月二十九日、胃にチューブを通し流動食を直接骨へ注入する手術を行っているが、これとて本人の望んだことではなく、周囲の人の奨めに従ったまでであった。自分の生死にはこだわりを持たず、かえって周囲の人に気を遣い、一滴の水も喉を通らない状態の中で、私を角川源義氏の見舞に東京女子医大病院に行かせたりした。

死の側で笑む桂郎や秋の暮 玄

聖路加病院に見舞に來た斎藤玄の句であるが、もしそうしたことが可能であるなら、この頃の桂郎は、玄の句のごとく死の側からこの世を眺めているのではないかと思うことがあった。

甘からむ露を分かれてよ草の虫
魚影や夢にも澄める滑川

月の庭いま咲く花のひとつ知り

人間の思考を超えて、ひと頃の鬼気迫るものからくらべると、かえってやさしく、なつかしいものになっている。魂の遊泳、山本健吉氏の言う命の嬉戯であらう。臨終の芭蕉が、俳諧を妄執と断じ、「俳諧を忘れむ」としたことは『遺語集』に「如何に生涯好みし風流とはいひながら、是れも妄執の一つと云ふべけれ、本意なし」とある。芭蕉は生涯の俳諧を捨てることによって、風雅も手近な日常の中にあり、ありふれた人生に真実のあることに気付いた。「かるみ」というのもこの辺にあったのではなからうか。桂郎も境涯を超えよう超えようと嚮心し超えられなかったものが、境涯を捨てることによって命に灯がともり、生死の彼方に揺曳するかすかな寂光を捉え得た。

私は先に居直りなどといったが、桂郎ほど己が人生に正直に生きた人はないと思う。蛇笏賞受賞式の時「私は地獄へ行く」と挨拶されたが、案外あてが外れてとまどっているのではなからうか。最後に、遺句集『四温』（昭51、角川書店）から、命終に至るまでの作品をあげておく。

粕汁にあたたまりゆく命あり
茶の甘き葉のあとや西行忌
底のなきしづかさになり鳥曇
虫のこゑいまに欲しと言はるれば
虫の秋眠れぬ夜はねずにあり
柚子釜の香をありありと病臥かな